

前秦崩壊と華北動乱

——淝水の戦い前後における関西と関東——

小野

響

はじめに

西晋は西暦二八〇年に後漢以来の統一を成し遂げたが、それは長く続く事無く崩壊し、再び中国は群雄割拠の時代を迎えた。その初期において主役となつたのは、「五胡」とも呼ばれる非漢族の勢力であり、史上その時代を五胡十六国時代と称す。三〇四年の匈奴の劉淵の挙兵から、四三九年の北魏による華北統一までの約一四〇年間に亘る五胡十六国時代であるが、その間における画期の一つとして淝水の戦いが挙げられる^①。この戦いは周知の通り、三八三年に前秦（苻氏による建国）と東晋の間で起こった戦いであり、百万を超えると呼称する大軍を動員し、君主たる苻堅自らが率いた前秦軍であつたが、謝玄を中心とする東晋軍に敗北を喫してしまう。その後、鮮卑の慕容垂（後燕を建国）や羌の姚萇（後秦を建国）等が相次いで前秦から独立していき、一時期は華北と四川を併せた広大な地域を治めていた前秦は、瞬く間にその領域を減じさせていき、やがて滅亡してしまう（三九四年）。

この淝水の戦い以降の前秦の急速な崩壊、滅亡とその様相については、旧来その種族的な面が注目されていた。例えば、谷川一九九八は前秦崩壊の理由を、種族という現実の社会結合原理を越えようとした苻堅が、結果としてそれを超える事が出来なかつた点に求めている^②。また三崎二〇一二は、淝水の戦い後における前秦分裂の様相を「諸

民族の自立の動きが再燃^③したと見做す。このような議論は枚挙に暇がない。確かに、当時の前秦は氐・漢・羌・鮮卑等々の多様な種族を包括して構成されており、前秦から独立していった諸国の中には、鮮卑や羌といった、氐とは違う種族の人物を君主に戴く事によって建国されたものもあった。この点から見ても、種族という視点は前秦崩壊の重要なファクターの一つとして存在すると言えよう^④。

しかし、それとは違う視点を提供した研究もある。藤井二〇〇一は、苻堅の治世下において全国政権を目指した前秦と、建国以来前秦の根拠地であった関中地域の有力漢人とは乖離し、関中漢人が前秦を見限って姚萇を推戴した事によって後秦が生まれたとする。ここで藤井氏は、五胡十六国時代の政治史の検討において、種族の問題と共に地域性が重要であると述べている。これは種族問題が中心となりがちな五胡十六国時代研究において、重要な視点であると考ええる。この地域性と言う観点に立った時、淝水の戦い以後の華北の動乱は如何なる意味合いを持つのだろうか。既に述べた様に、淝水の戦いは五胡十六国時代の画期である。そうであるにも拘らず、これまで種族的な問題がその関心の大半を占めていた。そこで本論は、かかる地域性を中心とした視点に立脚し、淝水の戦い以後の華北の情勢の一端を考察する。それによって、一時は華北と四川を併せた地域を領域下に収めて強勢を誇った前秦が、何故斯くも呆気なく崩壊してしまったのか、その原因について論じていきたい。

具体的には、前秦が淝水の戦いで敗北した後の情勢で最も特徴的な点、つまり華北が長安を中心とする関西^⑤と、鄴を中心とする関東の二つの地域を中心とする形に分割され、且つそれぞれの地域内で争覇が行われた事に着目する^⑦。

淝水の戦いの敗北によって前秦の支配は動揺し、多くの離反を招き数々の国が生まれる。しかし、一口に離反といっても、よく注意して見ると、その志向性には大きく二つの潮流があった。即ち、関西では、前秦から分離独立

をしたとはいえ、その多くの勢力が前秦や苻堅を全否定するのではなく、寧ろそれを受け継ぐ様な形で自らの基盤を固めようとする動きが見られる。その一方で、関東では、嘗てその地域を治めていた前燕が意識され、その君主氏族であつた鮮卑慕容氏による燕帝国復興の名分の下、中心的な勢力を形成した。この二つの違いが果たして何を意味するのか。次節以降では、それについて、地域別に具体的に見ていき、考察を進めていきたい。

一、淝水の戦い以後の関西

王朝単位で見た時、淝水の戦い直後の関西で中心的な存在であつたのは、前秦の將軍の地位から自立した姚萇が率いる後秦であつた。^⑧しかし、それに対して前秦の方も勢力を減退させたとはいえ粘り強く抵抗し、前秦後秦両国の闘争が関西にて展開された。かかる状況下の関西において、依然として前秦や（その生死に関わらず）苻堅は強い影響力を持ち続けた。^⑨そこでまず、苻堅について見てみよう。ここで注目するのは、彼が異姓王朝からも諡を贈られている点である。

①後秦よりの諡

『資治通鑑』 卷一百六 孝武帝太元十（三八五）年条

（八月）辛丑、萇人を遣わして堅を新平佛寺に縊せしむ。〔年四十八。〕張夫人・中山公詵皆な自殺す。後秦の將士皆な之の爲に哀慟す。萇其の名を隠さんと欲し、堅に諡して壯烈天王と曰う。^⑩

②後涼よりの諡^⑪

『晉書』卷一百二十二 呂光載記

光是に至りて始めて苻堅の姚萇の害する所と爲るを聞き、奮怒哀號し、三軍縞素し、城南に大臨し、堅に偽諡おくりなとして文昭皇帝と曰う。長吏百石已上斬續に服すること三月、庶人哭泣すること三日なり。^⑫

これは、前秦が苻堅の没後、苻丕や苻登を君主に戴いてなお存続し続ける中で、同時並行的に異王朝から諡を贈られるという稀有な情況である。^⑬ また言うまでもなく、苻堅は前秦を継承した苻丕からも諡を贈られているから、苻堅はほぼ同時期に三つの勢力からそれぞれ諡を贈られた事になる。^⑭

筆者は嘗て小野二〇一六において、前秦が苻堅政権期の早い段階で、苻堅個人へ権力を集中させた体制を構築した事を指摘した。そして、彼が善政を布いていた事は、当時の関西の人々の記憶の中に強く残っていたと思しい。^⑮ それらが組み合わさった結果、苻堅を肯定的に取り込んだ方が勢力の安定化に繋がるような土壌が、関西に育まれたのだらう。姚萇の行動から、苻堅延いては前秦の関西における強い影響力が見て取れる。例えば上で引用した『資治通鑑』卷一百六にも表れているように、姚萇は苻堅に諡を贈って、自身の指揮下にある将士の動揺を抑えようとしている。これは苻堅の持つ影響力が、姚萇軍の中において、看過出来ない規模のものであった事を示唆している。また、姚萇は苻堅に反旗を翻す形で自立したにも拘わらず、自身の皇帝即位に先立って旧主たる苻堅から禅譲を求めている。

『晋書』卷一百十四 苻堅載記下

苻 又た尹緯を遣わして堅に説かしめ、堯舜禪代の事を爲さんことを求む。堅緯を責めて曰く「禪代は、聖賢の事なり。姚萇は叛賊なれば、奈何ぞ之を古人に擬えん」と。堅既に萇の禪代を以てするを許さず、罵りて死を求むれば、萇乃ち堅を新平佛寺中に縊す、時に年四十八。^⑧

この姚萇の要請は結果として失敗するものの、禪譲を求めている以上、姚萇が苻堅に何らかの正統性を認めており、且つそれが彼にとって有利に働くと考えていた事は疑いない。更に姚萇は禪譲を断られたものの、皇帝を名乗った時には前秦の五行を継承している。また、その即位の場所である長安は、関西の中心地域であると共に、前秦建国以来の首都でもあった。

『晋書』卷一百十六 姚萇載記

太元十一年を以て萇 皇帝の位に長安に僭^⑨即き、大赦し、改元して建初と曰い、國號は大秦、長安を改めて常安と曰う。妻の虵氏を立てて皇后と爲し、子の興 皇太子と爲し、百官を置く。自ら火徳を以て苻氏の本行を承くるを謂い、服色漢氏の周を承くるの故事の如くす。^⑩

筆者は嘗て小野二〇一三において、匈奴の劉曜によつて建国された前趙が西晋の五行を継承した事について、西晋を受け継ぐべき過去のものとした可能性を指摘した。前趙建国当時、江南の地に東晋（及びその基となる司馬睿集團）が存在していた事と考え合わせれば、劉曜の西晋の五行継承は「晋」に心を寄せる人々へ向けた正統性の旗印として

機能する事を期待されていたと思われる。かかる五行の設定等に基づく五胡諸国における中原王朝の嫡流としての自認が、東晋を否定する事と繋がる点は、既に三崎二〇一二に指摘されている。また川本一九九八では、五胡諸国において自らを中華、東晋を辺境と見做す認識があつた事が説かれている。更に羅二〇〇四は、この劉曜の五行設定を、東晋の正統性を否定し、胡族政権である自らを中原王朝の正統後継者に設定するものであつた、と指摘する。何れにせよ、右で述べた劉曜の五行設定には、自身の王朝が西晋やそれに先行する中原王朝を正しく引き継ぐものであり、東晋を否定する意図を持ったものであつたと見做せよう。この劉曜の手法を姚萇の事例と比較してみれば、姚萇もまた苻堅の死亡によつて前秦は滅んだとし、苻丕等によつて継承された前秦は単なる傍流に過ぎず、前秦（就中苻堅政権）の有していた正統性は自らに継承されている事を標榜しようとした、と見做し得る。

さて、以上の見解が大筋を逸していないならば、一見すると奇異な姚萇の行動にも説明がつく。彼は、苻堅へ反旗を翻す↓苻堅に禪譲を求める↓断られたので苻堅を殺害する↓苻堅の死に動揺する将士の為に、苻堅に諡を贈る↓皇帝に即位して前秦の五行を継承する、という順序で行動している。この一連の姚萇の行動は、苻堅が関西に強い影響力を依然として有していたと考えれば、理解し易いものとなる。即ち、淝水の戦いの後であっても、苻堅に対する支持はなお根強く関西に残っていたのである。姚萇はそれを利用して、自らの政権の基盤固めを行ったのだろう。かかる姚萇の行為から、例え藤井二〇〇一の指摘する様に前秦と関西漢人の乖離が存在したとしても、なお苻堅を正統と認定せねば、関西統治は難しかった状況が窺える。

前秦以外の王朝によつて、苻堅個人の正統化が行われた結果、それに対応する為か、本家と言うべき前秦においても、同様に苻堅個人を押し出す手法が用いられた。

『晋書』卷一百十五 苻登載記

堅の神主を軍中に立て、載するに輜輶・羽葆・青蓋を以てし、車黄旗を建て、武賁の士三百人は以て之を衛り、將に戦わんとせば必ず告げ、凡そ爲す所を欲さば、主に啓して後ち行う。甲を繕い兵を纂め、將に師を引きて東せんとするに、乃ち堅の神主に告げて曰く「維れ曾孫皇帝臣登、太皇帝の靈を以て恭しく寶位を踐む。昔ごろ五將の難あり、賊羌肆まに聖躬を害すは、實に登の罪なり。今義旅を合するに、衆五萬を餘す。精甲勁兵、以て功を立つるに足る、年穀豐穰し、以て贍に資するに足る。即日、星言電邁し、直ちに賊庭に造り、奮いて命を顧みず、隕越期と爲し、庶わくは上は皇帝の酷冤に報い、下は臣子の大恥を雪がんことを。惟れ帝の靈、降りて厥の誠を監よ」と。因りて歔歔流涕す。將士悲慟せざるは莫く、皆な鉞鎧に刻みて死休の字を爲し、戦死を以て志と爲すを示す。戦う毎に長稍鉤刃を以て方圓大陣を爲り、厚薄有るを知らば、中より分配し、故に人戦を爲してより、向う所前無し。^②

ここからも、苻堅への支持の集まりが強く感じられる。^②要するに、淝水の戦い以後であっても、関西の地では、なお前秦や苻堅の存在が大きな影響力を有していたのである。特に苻堅はその善政もあって、関西に強い支持をその死後に至つても保持し続けていた。^③以上が淝水の戦い以後の関西の様相であるが、では、一方の関東ではどのような状況であつたのだろうか。

二、涑水の戦い前後の関東

涑水の戦い以後の関東地域で中心的な存在となったのは、鮮卑慕容氏の一族——即ち前燕の宗室——である慕容垂である。彼の建国した後燕は、嘗て関東地域を治めていた前燕の旧版図を概ね回復し、燕帝国の復興と言う点では申し分ない成果を挙げる。前燕は三七〇年に前秦によつて滅ぼされるが、後燕の建国は三八四年であり、その間に十四年の中断があつた。そうであつてもなお、鮮卑慕容氏は関東の地において支持を失つていなかった。²³⁾

前秦によつて併呑される以前の関東は、前燕によつて統治されていた。そして慕容儁の時代に前燕は関東への支配を確固たるものとした（三五七年に薊から鄴に遷都）。その支配の実績が、涑水の戦いの敗戦後に前秦が動揺した時、関東士人をして慕容氏を擁立せしめたのであろう。²⁴⁾ この時に擁立される対象として、慕容氏の中の実力者であつた慕容垂が選ばれたのは、「前燕の正統」よりも、「慕容氏の血統」が重要視されたからだと思しい。²⁵⁾

では、前燕と後燕と言う二期に亘る慕容氏の支配に挟まれた前秦の関東統治は、どの様なものであつたのだろうか。そもそも前秦の関東統治は、三七〇年の前燕併呑以降、関東全域を担当する人物を置き、その下で運営される体制を採つていた。赴任人物の推移は以下の通りである。なお、一々言及はしないが、史料として『晋書』と『資治通鑑』を主として参照し、年次は『資治通鑑』の繫年に依拠した。

【前秦関東担当行政長官表】

赴任期間	赴任者名	官 職
三七〇～三七二年	王猛	使持節・都督関東六州諸軍事・車騎大將軍・開府儀同三司・冀州牧
三七二～三八〇年	苻融	使持節・都督六州諸軍事・鎮東大將軍・冀州牧
三八〇～三八五年	苻丕	都督関東諸軍事・征東大將軍・冀州牧

※三者共通の官職には下線を引き、三者類似の官職には波線を引いた。

一見して分かる通り、三七〇年の前燕併呑直後から、三八五年の苻丕の鄴退去までの十五年間に亘って前秦は関東経営を行っていた事になる。彼らは皆、関東の中心地たる鄴に鎮しており、そこから関東経営に携わっていた。都督号については異同があるものの、同一の機能を果たしたものと見做して問題ないだろう。^⑤共通しているのは冀州牧と將軍であり、それぞれの將軍号については、各人のそれまでの活躍に応じて上下があるのだろう。苻丕のみ使持節を有していない点が若干気にかかるが、もしかしたら史料の欠落があるのかもしれない。

それぞれの人物について説明を加えておこう。最初に関東に赴任した王猛は、苻堅の統治を支えた名宰相として有名であり、北海出身の漢族である。関東出鎮以前も、関東出鎮の任を苻融と交代して中央に戻った後も、苻堅の絶大な信頼を背景に前秦の国政運営を担当した。彼は淝水の戦いの前に死去する。^⑦王猛の後任たる苻融は苻堅の同母弟であり、幼い頃から聡明で知られ、成人してもその評価に違わず事なく軍事に政治に活躍する。王猛の死後は、前秦の宰相として苻堅を支えたが、淝水の戦いの時に敗死してしまう。^⑧苻融の後任たる苻丕は苻堅の庶長子である。

文武の才能は苻融に次ぐとされ、彼もまた軍事政治の両面に精力的に活動する。庶子であったから、太子にはなっていないが、本来の苻堅の太子苻宏が、苻堅の死後に東晋への亡命を余儀なくされた為、苻堅の後継者として前秦の皇帝を名乗る。²⁴⁾

以上の三人が、前秦の関東統治の歴代の最高責任者であるが、何れであつても、苻堅の信頼厚く、また関東赴任以前に既に実績を積んでいる人物が起用されている。前秦の領域の東半を管轄している以上、それは当然の事ではあるが、そうであるならば、彼らによる関東統治が無軌道なものであつたとは考え難い。²⁵⁾ 上述の通り三八四年には慕容垂が自立した為、それ以降は戦闘が激化し安定した統治であつたとは到底言えないものの、それ以前——即ち淝水の戦い以前——における統治は概ね安定していた様子である。²⁶⁾ そうであるにも拘らず、三八〇年に前秦の宗室の一人である苻洛が反乱を起こした。小林一九八八に拠れば、この反乱は前秦宗室の不满分子と旧前燕系の士人が結びついて起こつたものとされる。この時の苻洛の動員兵力は十万を数え、大規模な反乱であつた。つまり、王猛や苻融の統治を経てもなお、旧前燕系人士の中には前秦への反感が根強く残つていたと思われる。²⁷⁾

しかし、上で述べた様に前秦の関東統治が極悪非道であつたとは考え難く、それに対する反発ではなかつたであろう。史料を繙けば、苻堅が関東の人士を不当に弾圧したという事は無く、寧ろ積極的に彼らを登用してこういう姿勢が看取される。

『資治通鑑』 卷一百三 簡文帝咸安二年（三七二） 条

春、二月、秦清河の房曠を以て尚書左丞と爲し、曠の兄の默及び清河の崔逞・燕國の韓胤を徵して尚書郎と爲し、北平の陽陟・田勰・陽瑤 著作佐郎と爲し、〔晉志、著作郎一人、之を大著作と謂い、専ら史任を掌る。又

た佐著作郎八人を置く。颶、音協。」郝略清河相と爲す。皆な關東の士望にして、王猛の薦むる所なり。瑤鶯の子なり。〔陽鶯燕に仕え、三朝に歴事す。鶯、音務。〕

ここからも窺い知れる通り、前秦は關東の有力者を積極的に中央・地方を問わず召し抱えている。³⁴ 既に藤井二〇〇一も、苻堅は積極的に關東の士人を懐柔し、登用した事を指摘している。

以上の様に前秦苻堅政権は、關東士人を弾圧するどころか政権に取り込む姿勢を見せている。そうであっても、關東士人は前秦に恩義を感じて、彼に忠誠を尽くそうとしなかった。何故ならばそれは關東士人にとってみれば特別な事ではなく、常態化している事であつたからである。それについて詳しく見ていくため、清河崔氏の一人である崔宏（下引用文中の崔玄伯）の事例に注目してみよう。

『魏書』卷二十四 崔玄伯伝

崔玄伯、清河東武城の人なり。名高祖廟の諱を犯す。魏の司空林の六世孫なり。祖の悦、石虎に仕え、官司徒左長史・關内侯に至る。父の潜、慕容暉に仕え、黃門侍郎と爲り、並びに才學の稱有り。玄伯少くして儁才有りて、號して冀州神童と曰う。苻融冀州に牧たりしとき、虚心に禮敬す。陽平公侍郎を拜し、冀州從事を領し、征東記室を管し、出でては庶事を總べ、入りては賓友と爲り、衆務理を修め、處斷滯無し。苻堅聞きて之を奇として、徴して太子舍人と爲さんとするも、辭するに母の疾を以てして就かず、著作佐郎に左遷す。苻丕冀州に牧たりしとき、征東功曹と爲る。³⁵

崔宏は前秦、後燕、そして北魏に仕えて活躍した人物である。この史料から判明するのは、後趙↓前燕↓前秦↓後燕↓北魏、という、関東士人の一たる清河崔氏の出仕情況である。^⑧川本一九九八は、崔宏をも含めた華北漢人士大夫が、胡族国家に仕えるのを潔しとせず、東晋へ心を寄せていた事を指摘する。しかし、彼らの心の中はどうあれ、現実として清河崔氏は世代を超えて胡族国家に出仕している。これは、彼ら関東士人側も自身の勢力の保全の為に国家権力と敵対するのは得策ではなく、一方の後趙等の五胡諸国にとっても関東士人の力は無視し得ないものであった事とが合わさって起こった現象であろう。^⑨そうであるならば、彼ら関東士人は王朝が転変していく中でも、しっかりと実力を蓄え、各王朝に重用されていたと言つて良い。また、崔宏が苻融や苻丕の下、関東統治に携わる事は肯んじているのに、太子舎人という中央官を拒否した事は、彼が関東を離れる意志を有していなかった事を示唆している。^⑩

さて、かかる関東士人の状況に鑑みれば、苻堅が関東士人を尊重したとしても、それによつて恩を感じさせる事は出来なかつただろう。小野二〇一六でも指摘したが、苻堅政権は苻堅と彼が見出した側近達を核として構成されていた。だから拔擢された側近達は、その恩義に報いる為に苻堅の与党として尽力するのであるが、関東士人の場合は拔擢される事に特別な恩義を感じる必要がなかつた。^⑪それが関東における慕容氏への支持の残存に繋がつたのである。

即ち、関東は前秦の軍事的勝利によつて支配下に含み込まれただけであり、その軍事的優位が崩れたと見るや、前秦にこだわる必要は無かつたのである。^⑫また、苻洛の乱に表出したような旧前燕系の関東士人と前秦との間の潜在的な対立感情もあつた。そうであるならば、混乱期において関東士人が慕容氏を推戴しようとした動きも、故無き事では無い。これら関東の状況は、苻堅政権の善政を覚えている人々を統治する必要のあつた関西地域とは根本

的に異なるものと言える。

以上の様に、関西の事例と比較した時、関東の置かれた状況が根本的に違う事が分かる。淝水の戦い以後の動乱期において、関東では関西と違って、苻堅の正統後継者を標榜する人物は出現せず、燕王朝の復興が行われた。ここに慕容氏への支持の相対的強さが見て取れる。これは関西において、前秦や苻堅が重要な要素になった事とは、全く異なる状況である。その違いは、前秦の関東統治と関東士人の在り方に因るものである。前秦の関東統治の手法は、在地有力者の吸収であつた。苻堅による実力主義的拔擢を主とした苻堅政權や、それを中心とする関西地域とは、そもそも構成が異なる。この在地有力者の吸収は、急速な前秦の拡大に適應した政策であると言つて良い。しかし、その手法は苻堅のカリスマの浸透や、拔擢による苻堅個人への忠誠を生み出し難い。特に関東士人達は、仕官する事に慣れており、征服した国が彼らを登用する事は常態化していたのであつた。④ そうであれば、登用によつて彼らに恩義を与える事は不可能であらう。ここに関東と関西の質の差の根源がある。

三、後秦と後燕の建国

本論の冒頭でも述べた様に、五胡十六国時代において種族の問題は重要なファクターの一つである。淝水の戦い以後の華北動乱もまた、その点から論じられる事が多いのは既に述べた。では、地域性と言う観点から論じてきた本論の視点を踏まえれば、かかる動乱について如何なる理解を示す事が出来るのだろうか。本節では、後秦と後燕という関西と関東の二つの中心的勢力に焦点を絞つて、考察を進めていきたい。

ここで注目するのは、後秦と後燕それぞれの建国時の成員である。建国の時より、姚萇や慕容垂に与力した者は

誰であつたのか。この最初期構成員の分析を通して、各国の中核集団の性質を明らかにしたい。

まず、後秦について見てみよう。姚萇の自立時について、史料は以下の様に記している。前掲注⑧と重複する部分もあるが、行論の都合上必要であるため、煩瑣を承知で引用する。

『晋書』卷一百十六 姚萇載記

萇懼れ、渭北に奔り、遂に馬牧に如く。西州豪族の尹詳・趙曜・王欽盧・牛雙・狄廣・張乾等五萬餘家を率いて、咸な萇を推して盟主と爲す。(…中略…)乃ち緯の謀に従い、太元九年を以て自ら大將軍・大單于・萬年秦王を稱し、境内に大赦し、年號は白雀、稱制して事を行ふ。天水の尹詳・南安の龐演を以て左右長史と爲し、南安の姚晃・尹緯左右司馬と爲し、天水の狄伯支・焦虔・梁希・龐魏・任謙從事中郎と爲し、姜訓・閭遵掾屬と爲し、王據・焦世・蔣秀・尹延年・牛雙・張乾參軍と爲し、王欽盧・姚方成・王破虜・楊難・尹嵩・裴騎・趙曜・狄廣・党刪等帥と爲す。^④

ここを中心になつてゐるのは、西州豪族と、南安姚氏——即ち後秦の宗室^④——である。既に藤井二〇〇一によつて、天水尹氏が関西における有力氏族であつた事は指摘されており、更に藤井氏は、趙曜と牛双はそれぞれ、天水趙氏と隴西牛氏であつて、前秦草創期から苻氏に尽力してきた氏族である、と指摘してゐる。その他にも王欽盧は、前秦に降伏する前の姚氏集団の部将であつたし、天水狄氏も有力な一族であつたと思しい。^⑤史料状況から全員の素性を把握する事が出来ない憾みがあるが、藤井氏も指摘する通り、旧姚氏の勢力（但し羌のみに限る集団ではない事は、既に先行研究によつて指摘されている）^⑥に関西の有力氏族が合流して、後秦が建国されたと見做しても良いだろう。

前秦に反旗を翻しつつも、前秦や苻堅を完全否定する事無く、関西に勢力を確立させたのが後秦である。ここに、羌（乃至旧姚氏集団）による前秦からの離脱といった面を見る事は出来ないだろう。むしろ、淝水の戦いにおいて（単純な戦力比から見れば）あり得べからざる敗戦を喫した前秦に附いていては、自らの身が危ないと判断した一部の勢力が、苻堅の怒りをかかった姚萇を担いで自立したと見るべきだろう。しかし、その後の行動を見れば、保身に走った豪族層は兎も角、民衆レベルではまだ善政を齎した苻堅への支持は根強く、前秦や苻堅を完全否定する事は難しかった様子が窺える^⑧。附言すれば、關尾一九八八において、姚萇の自立に伴って彼に帰属してきた人々は定着せず流動的であつた事が指摘されている。その中には、姚萇から前秦へ鞍替えをした者もあり、当時の関西が、前秦対後秦という大きな構図の中で、揺れ動いていた事が分かる。

次に後燕の場合を見てみる。慕容垂の自立は、三八四年に滎陽で行われた。その時の事を史料は以下の様に記す。

『資治通鑑』 卷一百五 孝武帝太元九年（三八四）条

垂滎陽に至り、群下固く請いて尊號を上つるも、垂乃ち晉中宗の故事に依り、「晉元帝の廟號中宗なり。上、時掌翻。」大將軍・大都督・燕王を稱し、承制して事を行い、「晉元帝王を稱して承制す、九十卷建武元年に見ゆ。」之を統府と謂う。群下稱臣し、文表奏疏とし、官爵を封拜し、皆な王者の如くす。弟の德を以て車騎大將軍と爲し、范陽王に封ず。兄の子の楷征西大將軍と爲し、太原王に封ず。「燕本より德を封じて范陽王と爲す、今其の故に復す。楷、恪の子なり。恪太原王に封ぜらる、今楷をして父の爵を襲わしむ。」翟斌建義大將軍と爲し、河南王に封ず。餘蔚征東將軍・統府左司馬と爲し、扶餘王に封ず。衛駒鶴揚將軍と爲し、慕容鳳建策將軍と爲す。「建策將軍、亦た慕容垂の一時に署置する所なり。」衆二十餘萬を帥いて、石門より河を濟り、

長驅して鄴に向かう。^⑤

とあり、更に同月中に、

『資治通鑑』 卷一百五 孝武帝太元九年（三八四） 条

（正月）庚戌、燕王垂鄴に至り、秦の建元二十年を改めて燕元年と爲し、服色朝儀、皆な舊章の如くす。前の岷山公庫偁官偉を以て左長史と爲し、滎陽の鄭豁等 從事中郎と爲す。「凡そ前の字を帶びるは、皆な前燕の授官する所なり。」慕容農兵を引きて垂と鄴に會い、垂其の稱する所の官に因りて之を授く。「即ち張驥等の推す所の官なり。」世子の寶を立てて太子と爲し、從弟拔等十七人及び甥宇文輸・舅子蘭審を封じて皆な王と爲す。其餘の宗族及び功臣の公に封ぜらるる者は三十七人、侯・伯・子・男は八十九人なり。^⑥

と追加任命を行っている。^③ここに集まった人々が後燕の最初期構成員の中心的存在であつたと言つて良い。慕容氏に連なる慕容德等の他に、丁零の翟斌や、夫余の余蔚等も集まつてきている。丁零翟氏は、後趙↓前燕↓前秦とその支配者を変えていき、淝水の戦い以後の混乱に乗じて、勢力を築き、慕容垂と合流した。余蔚は元々夫余の王子であり、慕容皝の時代に夫余が攻められた後、前燕に仕える様になった。この余蔚は、前秦が前燕を滅ぼす時には前秦に内応しているにも拘らず、再び慕容氏に付き従っている点で興味深い。^④衛駒は昌黎鮮卑であり、自身の勢力を従えて、慕容垂に投降している。鄭豁は滎陽を本貫とする関東士人である。^⑤彼等は皆淝水の戦いの後、動揺する関東において、慕容垂に付き従う事によって、保身を図つたのであろう。また、慕容農は、慕容垂に呼応して関東

に勢力を築き、慕容垂に合流している。その時に集まったのは、「趙魏」の地に居る人々が中心であった。いずれにせよ、関東に展開する、前秦を肯んじない人々が、慕容垂の許へ結集してきている事が窺い知れる。⁷⁵⁾

後秦と後燕を比較すると、後秦は関西士人の比率が高く、また旧姚氏勢力とは深く関係しない人々も多数参画していた。一方の後燕では、関東士人と共に、丁零や夫余、そして慕容氏を含む鮮卑の姿も多数看取される。多くが元々前燕旧臣とでも言うべき人々であり、淝水の戦いによって動揺する前秦を見限り、旧に復するが如く、慕容氏に合流したのである。

石井二〇一〇も指摘するように、後漢以降の関西の政局には塙と呼ばれる武装集団が深く関与していた。それは、軍事力を有する勢力の動向が、関西の政局に深く影響するからである。その一方で、関東では、塙も存在したが、後漢以来の名望を持つ士人達が、官僚として活躍する事によって、影響力を保持していた。遡って漢代には「豳曰、關西出將、關東出相⁷⁶⁾」と言われるような、関西は尚武、関東は尚文、という気風が存在が指摘されている。以上に述べた関東と関西の違いは、その気風の一部が五胡十六国時代に至るまで残っていたという事をも示唆している。関東士人達は、日々刻々と変化する情勢の中、各王朝から登用を持ちかけられる事に因って自身の実力を自覚し、自信を深めていったのだと思われる。ここに前秦にこだわらずとも良い、とする彼らの姿勢の根源がある。これが、降って隋唐時代にまで影響力を保持し続ける山東貴族へと繋がっていくのである。

「淝水の戦いの敗北」というターニングポイントは同じであつても、それが前秦との決別に直結するのか将又しないのか、という点で、関東と関西の対応はそれぞれ異なっている。この背景には、種族問題ではなく、前秦の統治が各地域において如何に受け止められてきたか、という点があると言えよう。

おわりに

従来、涇水の戦い以後の前秦の東西分裂は、苻堅の治世下における鮮卑や羌等を中心とした種族問題を中心に論ぜられる事が主であつた。しかし、本論で述べた事に従つてみると、そもその背景として、関東と関西の地域的な差異を無視する事は出来ない。従来指摘されてきた様に、転換点として涇水の戦いがあつた事は間違いない。但し、それによつて齎されたのは、同じ前秦支配の動揺ではあつたが、そこから何が生み出されるのかという点は地域によつて異なつていた。その地域こそが関東と関西であり、その差は決して小さいものでは無かつた。関東では前秦や苻堅と決別し、嘗て関東を治めていた慕容氏への求心力が高まつた。一方の関西でも、前秦から自立する動きは現れたものの、完全に前秦や苻堅と決別する事は出来なかつた。それは、苻堅の善政が関西においてしつかりと根付いており、一度の敗戦で容易に覆る様なものではなかつたからである。

関西では前秦や苻堅の影響力がなお強く、姚萇の様に苻堅を殺害した者であっても、苻堅や前秦の正統を受け継ぐように努力する必要があつた。関東では前燕がその統治を通して、慕容氏の関東における正統なる支配者としての地位を確立させた。そこに集まる支持は、苻堅のカリスマが（関西の様に）関東に浸透しなかつた事もあつて、涇水の戦いの後に、慕容氏に連なる慕容垂が関東の地で燕を復興する事を後押しする。ここに、慕容氏の関東地域における影響力の強さを窺い知る事が出来る。

関東では、苻堅は関西にあつた様な自身への支持を、慕容氏への支持に取つて代わらせる事が出来なかつた。一方の関西では、反前秦の挙兵があつたものの、それでもなお親苻堅・親前秦の勢力が存在し続けた。この対照的な二地域の状況は、関東における関東士人と各王朝の協力関係、関西における苻堅の拔擢人事による中心的人物の入

れ替わり等が絡み合つて発生した。これらの政治的な面の土壌があつてこそその前秦崩壊と華北動乱であり、種族問題はその根拠的理由にはなり得ない。また、かかる背景があつたればこそ、前秦は関東と関西で綺麗に分割され、且つそれぞれの地域内で争覇戦が行わる様になつたのである。

以上の理解に基づけば、淝水の戦いの後の前秦の急速な崩壊の原因は、究極的には前秦の華北統治の手法に求められるだろう。関東にも関西にも反前秦的な勢力はあつた。しかし、関東におけるその受け皿が前秦と深く関係しない慕容氏であつたのに比べ、関西での受け皿は前秦の部将として長く活動していた姚萇や呂光等であつた。また、関西での前秦（就中苻堅）の評価は、淝水の戦い以後であつても、なお高いものであり、それが前秦に反旗を翻したとしても、前秦に配慮せねばならない政治的背景を作り出した。これが、関東が早々と前秦の影響下から離脱して、慕容氏を中心とした争覇戦を繰り返すのに対して、関西において前秦を中心とした争覇戦が十数年も続けられる事となつた原因である。

本稿では、淝水の戦いの直後の諸国しか検討出来なかつたが、前秦の崩壊後、関西には後秦と夏、関東には後燕と北魏が出現して、それぞれ各地の中心的な勢力となる。最終的に華北は北魏によつて統一されるのだが、北魏がこの関西と関東という二つの地域をどの様に統合したのか、という点は、改めて考察されて然るべきだろう。その点については今後の課題としたい。

註

- ① 例えば、三崎二〇一二では、淝水の戦いを境として五胡十六国を前半と後半に分割している。
- ② また、淝水の戦い以降の慕容氏の自立の動きを「一種の種族独立運動」と評している（谷川一九九八、七四頁）

③ 三崎二〇一二、九八頁。

④ かつて中国において、この淝水の戦いを通して前秦の性格について論争が行われた。その論争は市来一九九六に詳しくまとめられている。論争は、前秦が氐中心の征服的性格を持つ「民族的性格」の濃い政権であるのか、将又全くその逆で氐と漢族とが融合した「民族的性格」の薄い政権であるのか、と言う根本から対立する二説を軸として展開された。結局、結論が出る前に論争そのものが下火になってしまったが、市来氏はこの論争を研究史上の画期であり、現在の研究者にとつて意識せざるを得ない問題を様々に提出した言わば土台となっている事を指摘している。

⑤ 本論における関西は、藤井氏の述べる関中と概ねその範囲を一致させる。即ち、長安を中心とする華北西部である。本論では関東との対比の都合上、「関西」の語を用いる。

⑥ 朴二〇一〇は、五胡十六国時代以降の華北において、関東に鄴、関西に長安という二つの政治的な中心地が発達した事を述べる。また、当時の歴史地理学的な見解は鄴（主編）二〇〇一に概観されているので、併せて参照されたい。

⑦ 鮮卑の慕容沖等によつて建国された西燕は、関西に徙民された関東の鮮卑を中心として構成されていた。その為、望郷の念に押されて、関東への移動を開始した。これが数少ない関東と関西を跨いで、根拠地を変えようとした事例である。

⑧ 但し、拒む姚萇を関西の士人達が説得して擁立した形であった。それ以前に姚萇は苻堅の怒りをおかしており、そのまま前秦に身を残していても処刑される恐れがあつた為、自立に踏み切つたとされる。

『晋書』卷一百十六 姚萇載記

堅既敗於淮南、歸長安、慕容泓起兵叛堅。堅遣子叡討之、以萇爲司馬。爲泓所敗、叡死之。萇遣龍驤長史趙都詣堅謝罪、堅怒、殺之。萇懼、奔於渭北、遂如馬牧。西州豪族尹詳・趙曜・王欽・牛雙・狄廣・張乾等率五萬餘家、咸推萇爲盟主。萇將距之、天水尹緯説萇曰「今百六之數既臻、秦亡之兆已見、以將軍威靈命世、必能匡濟時艱、故豪傑驅馳、咸同推仰。明公宜降心從議、以副羣望、不可坐觀沈溺而不拯救之。」萇乃從緯謀、以太元九年自稱大將軍・大單于・萬年秦王、大赦境內、年號白雀、稱制行事。

⑨ 前秦と後秦の闘争は三八五年の苻堅の死から、三九四年の滅亡まで、およそ十年間に亘つて行われた。谷川一九九八は、苻堅死後の前秦の粘り強い抵抗に、苻堅政権の健全さを見出す。また石井二〇一〇は、淝水の戦いの敗北後も、苻堅に味方する場の存在

を指摘する。何れにせよ、関西地域において苻堅や前秦を支持する勢力は少なからず存在しており、彼らが苻堅やその後継者達を支えていた事は疑いない。

⑩ 『資治通鑑』巻一百六 孝武帝太元十年（三八五）条

（八月）辛丑、苻遣人縊堅於新平佛寺。（年四十八。）張夫人・中山公誡皆自殺。後秦將士皆爲之哀慟。苻欲隱其名、諡堅曰壯烈天王。

※ □内は胡註。音註のみのものは省略。○は筆者補筆。以下『資治通鑑』引用文は全て同様。

⑪ 氏の呂光によって建国。その母集団は、元来は前秦の西域遠征軍であり、呂光はその総司令官であった。遠征中であつたため、淝水の戦いには不参加であり、西域からの帰還時に、淝水の敗戦やそれ以降の関西の混乱に遭遇し、苻堅の死後独立する。

⑫ 『晋書』巻一百二十一 呂光載記

光至是始聞苻堅爲姚萇所害、奮怒哀號、三軍縞素、大臨于城南、偽諡堅曰文昭皇帝。長吏百石已上服斬纁三月、庶人哭泣三日。

⑬ 禅讓革命によらない国家間で諡を贈ると言う点において、これは極めて稀な事例であると言えよう。なお、同様に五胡十六国時代において、禅讓によらない異姓王朝間で諡を贈った事例として、前燕が冉閔に諡を贈った一件がある。但し、これは崇りを恐れての行為であり、本論の論ずる所とは意味合いを異にするため、考察の対象から捨象する。

『資治通鑑』巻九十九 穆帝永和八年（三五二）条

（五月）辛卯、燕人斬冉閔於龍城。會大旱・蝗、燕王儁謂閔爲祟、（祟、雖遂翻。神禍曰祟。）遣使祀之、諡曰悼武天王。

⑭ 『晋書』巻一百十四 苻堅載記下
丕僭號、偽追諡堅曰世祖宣昭皇帝。

⑮ 苻堅は諡として、呂光と苻丕からは皇帝号を贈られ、姚萇からは天王号を贈られている。苻堅の生前の称号は天王であるため、諡号として天王が用いられる事は不可思議では無い。また苻丕は、前秦を継承したとはいえ、自身が皇帝号を名乗っている関係上、その祖先祭祀の称号が天王から皇帝に変更されるのも故無き事ではない。しかし呂光は、この後、即位して後涼を建国する時には天王号を名乗っており、何故苻堅に皇帝の諡号を贈ったのかは不明である。この問題は天王号と深く関わる問題であるため、後稿

を期したい。なお、五胡十六国時代における天王号については、谷川一九九八、内田二〇〇八等参照。

- ⑬ 苻堅の治世は五胡十六国時代の中でも高く評価される。代表的な史料としては以下のものがある。

『晋書』卷一百十五苻登載記 史臣曰条

永固雅量環姿、變夷從夏、叶魚龍之謠詠、挺草付之休徵、克剪姦回、纂承偽曆、遵明王之德教、闡先聖之儒風、撫育黎元、憂勤庶政。王猛以宏材緯軍國、苻融以懿威贊經綸、權薛以諒直進規諫、鄧張以忠勇恢威略、雋賢效足、杞梓呈才、文武兼施、德刑具舉。乃平燕定蜀、擒代吞涼、跨三分之二、居九州之七、遐荒慕義、幽險宅心、因止馬而獻歌、託棲鸞以成頌、因以功侔曩烈、豈直化洽當年。雖五胡之盛、莫之比也。

※下線は筆者。

これは唐人の評価であるが、「五胡の盛なり」と雖も、之と比する莫きなり」とあるように、苻堅（文中の永固。永固は苻堅の字）の治世を高く評価している。

- ⑭ 苻堅時代の統治は、宰相であつた王猛を中心に評価が高かつた。後に東晋軍が関西に侵攻した時に、軍内部で東晋の部将であつた王鎮惡（王猛の孫）が関西に自立する事を警戒する議論が起こつた。ここからも関西の人々と前秦の宰相であつた王猛の結びつきの存在が窺える。

『資治通鑑』卷一百十八 安帝義熙十三年（四一七）条

關中人素重王猛、裕之克長安、王鎮惡功爲多、由是南人皆忌之。沈田子自以嶢柳之捷、與鎮惡爭功平。裕將還、田子及傅弘之屢言於裕曰「鎮惡家在關中、不可保信。」裕曰「今留卿文武將士精兵萬人、彼若欲爲不善、止足自滅耳。勿復多言。」裕私謂田子曰「鍾會不得遂其亂者、以有衛瓘故也。〔會・瓘事見七十八卷魏元帝咸熙元年。〕」語曰「猛獸不如群狐」卿等十餘人、何懼王鎮惡。」〔爲沈田子殺王鎮惡張本。〕

- ⑮ 『晋書』卷一百十四 苻堅載記下

苻又遣尹緯說堅、求爲堯舜禪代之事。堅責緯曰「禪代者、聖賢之事。姚萇叛賊、奈何擬之古人。」堅既不許萇以禪代、罵而求死、萇乃縊堅於新平佛寺中、時年四十八。

①『晋書』卷一百十六 姚萇載記

以太元十一年萇僭即皇帝位于長安、大赦、改元曰建初、國號大秦、改長安曰常安。立妻姚氏爲皇后、子興爲皇太子、置百官。自謂以火德承苻氏木行、服色如漢氏承周故事。

②『晋書』卷一百十五 苻登載記

立堅神主于軍中、載以輜輶・羽葆・青蓋、車建黃旗、武賁之士三百人以衛之、將戰必告、凡欲所爲、啓主而後行。繕甲募兵、將引師而東、乃告堅神主曰「維曾孫皇帝臣登、以太皇帝之靈恭踐寶位。昔五將之難、賊羌肆虐于聖躬、實登之罪也。今合義旅、衆餘五萬。精甲勁兵、足以立功、年穀豐穰、足以資贍。即日、星言電邁、直造賊庭、奮不顧命、隕越爲期、庶上報皇帝酷冤、下雪臣子大恥。惟帝之靈、降監厥誠。」因歔歔流涕。將士莫不悲慟、皆刻鉞鎧爲死休字、示以戰死爲志。每戰以長稍鉤刃爲方圓大陣、知有厚薄、從中分配、故人自爲戰、所向無前。

③「苻堅にまつわる物」は、後秦の姚萇も用いている。彼が用いた苻堅の像は、戦闘を有利にしようとする目的を有していた事から見ても、苻登が用いた苻堅の神主に近い機能を期待されていたと思われる。しかし、苻堅殺害の張本人である姚萇が苻堅の靈験を信じこなすには無理があつたのか、結局この像は破壊されてしまっている。

④『太平御覽』卷三九六 人事部所引車類『秦書』

車類『秦書』曰、姚萇爲苻堅神像、戰求有利。軍中士衆出入並驚恐、皆云畏苻主像。萇嚴鼓斬之、以首送苻登。

⑤また、諸勢力糾合の核として、苻氏が担ぎ出されようとする事もあつた。以下の例は、前秦の涼州刺史の梁熙に美水令の張統が献策する場面である。そこで張統は、淝水の戦い以後の関西の混乱を收拾し、動向の読めない呂光を牽制する手段として、嘗て苻堅に対して反乱を起こして鎮圧された後、流刑に処されている最中であつた宗室の苻洛を盟主に仰ぎ、周辺勢力を糾合する事を提案している。結果として実行されないものの、この事象は、前秦領域下の涼州においても、苻氏が一定の求心力を保っていた事の証左となろう。

⑥『資治通鑑』卷一百六 孝武帝太元十年（三八五）条

美水令犍爲張統謂熙曰「今關中大亂、京師存亡不可知。〔長安已陷、而涼州不知、道梗故也。犍、居言翻。〕呂光之來、其志難測、

將軍何以抗之。」熙曰「憂之、未知所出。」統曰「光智略過人、今擁思歸之士、乘戰勝之氣、其鋒未易當也。將軍世受大恩、忠誠夙著、立勳王室、宜在今日。行唐公洛、上之從弟、勇冠一時、爲將軍計、莫若奉爲盟主以收衆望、推忠義以帥群豪、則光雖至、不敢有異心也。資其精銳、東兼毛興、〔毛興時刺河州。〕連王統・楊璧〔王統時刺秦州、楊璧時刺南秦州。〕合四州之衆、掃兇逆、寧帝室、此桓・文之舉也。」熙又弗聽、殺洛于西海。〔洛徙西海見一百四卷太元五年。梁熙既欲拒呂光、又殺符洛、不過欲保據涼州、非有扶顛持危之志也。〕

②③ 小林聡氏は「慕容氏は辺境時代から關係を持った「幽」、冀土人層との連携を後盾に、華北東半（関東）の支配を押し進め、自ら（北族の軍事指導者として以外に）土人の輿望を担って関東の民族としての地位を獲得した」（小林一九八八、七〇―七二頁。文中の括弧も原文ママ）と述べる。ここで言う名族化は、関東土人としての地位を得たという事であろう。即ち、関東の地を基盤として声望を集める「土人」として、慕容氏が関東土人から認知されていた、という事である。元来鮮卑であつた慕容氏が数十年の統治で「土人」と認知されるようになったのか、という点において疑問がないではないが、関東における慕容氏の支持は、関東土人によつて推戴されるべき存在としての慕容氏の存在を示している事については、筆者も強く賛同するものである。

②④ 関東土人のみならず、鮮卑の中において、慕容氏は特別な存在であつた。吉本二〇一〇は、鮮卑諸部において慕容部が最も正統な地位を占めていた事を客觀的事実であつた、と見做す。

②⑤ 内田二〇〇三において内田氏は、淝水の戦いの後、関東の地は、後燕や南燕といった諸燕が乱立している様相であつたが、その実、「燕」としての一体性を保とうとしていた事を指摘する。また、内田氏は、前燕最後の皇帝慕容暉を、後に後燕を建国する慕容垂が正統と認めていたとも指摘している。これは慕容垂即位以前では概ね首肯できる見解であるが、後燕の范亨の手になる『燕書』は、慕容暉の記録を少帝紀とする。即ち彼は後燕からの諡を持たない皇帝であり、しかも『燕書』には、後燕末期の慕容熙の記録（昭文皇帝紀）まで見える事から、慕容暉は後燕王朝を通じて諡を贈られなかつた事は間違いないだろう（但し、南燕から諡を贈られた事は『晋書』慕容暉載記に確認出来る。）。この点に鑑みれば、慕容暉は後燕において燕王室の正統な（と設定される）皇帝祭祀の対象に含まれていないと思われる。この点については、後燕理解に関わる問題でもある為、後考を期したい。また、范亨『燕書』については、朱一九三七参照。

②⑥ 例えば王猛の肩書きは、『晋書』では表の通りだが、『太平御覧』卷一百二十二 偏霸部所引『十六国春秋』前秦録では「都督諸軍事」としており、「関東」も「六州」も抜け落ちている。苻融や苻丕の肩書きについても、同様の事があるのかもしれない。恐らく「都督関東六州諸軍事」が正式な肩書なのだろう。

②⑦ 『晋書』卷一百十四 苻堅載記下王猛附伝。

②⑧ 『晋書』卷一百十四 苻堅載記下苻融附伝。

②⑨ 『晋書』卷一百十五 苻丕載記。

③⑩ 王猛が前燕を併呑する直前の事として、以下の記事がある。

『資治通鑑』卷一百二 海西公太和五年（三七〇）条

猛之未至也、鄴旁剽劫公行、及猛至、遠近帖然。號令嚴明、軍無私犯、〔言軍士不敢私犯鄴民也。〕法簡政寬、燕民各安其業、更相謂曰「不圖今日復見太原王。」

軍の規律が守られている前秦軍に、「燕民」が感激しているが、それは「太原王」即ち慕容恪を思い起こしたが故の感動であった。ここに、前燕末期の政情不安、そして前秦軍が鄴周辺に安寧を齎した事が窺い知る事が出来よう。但し、その安寧も慕容恪に結び付けられている点に、関東の地域における慕容氏の影響力の強さが反映されているとも言えよう。

③⑪ 前秦の関東統治は在地の有力士人を登用する体制であった。ここからも前秦が新領土統治を安定的に運営しようとする考えが見て取れる。と言うのも、前秦は苻堅政権になって以降、実力主義的拔擢を主とした人事登用を行っていた（小野二〇一六参照）。それを敢えて曲げてまで、かかる登用を行っている以上、何らかの意図を想定する事は不当ではないだろう。筆者はそれを、新領土の速やかな安定化にあると考える。唐一九五五もまた、この関東士人の登用を、新領土の支配を強固にする目的を持ったもの、と指摘する。

③⑫ 小林一九八八は、苻洛の乱における苻洛や、その参謀であった平顔（関東士人）への支持の集まりから、幽州方面における反前秦的な雰囲気存在を指摘する。

③⑬ 『資治通鑑』卷一百三 簡文帝咸安二年（三七二）条

春、二月、秦以清河房曠爲尚書左丞、徵曠兄默及清河崔暉・燕國韓胤爲尚書郎、北平陽陟・田颯、陽瑤爲著作佐郎、〔晉志、著作郎一人、謂之大著作、專掌史任。又置佐著作郎八人。颯、音協。〕郝略爲清河相。皆關東士望、王猛所薦也。瑤、鶯之子也。〔陽鶯仕燕、歷事三朝。鶯、音務。〕

③④ また前秦による前燕併呑直後の事として、以下の記事がある。

『資治通鑑』卷一百一 海西公太和五年（三七〇）条

堅以京兆韋鐘爲魏郡太守、彭豹爲陽平太守。〔燕郡鄴、以魏郡太守爲京尹。陽平、輔郡也、故堅皆以秦人守之。〕其餘州縣牧・守・令・長、皆因舊以授之。〔盡易州縣牧・守・令・長、既駭觀聽、且人情新舊不相安、故皆因舊。〕ここにある様に、前燕の旧中心地以外には、前燕系の人物を登用する方針であつた事が窺える。

③⑤ 『魏書』卷二十四 崔玄伯伝

崔玄伯、清河東武城人也。名犯高祖廟諱。魏司空林六世孫也。祖悅、仕石虎、官至司徒左長史・關内侯。父潛、仕慕容暉、爲黃門侍郎、並有才學之稱。玄伯少有儒才、號曰冀州神童。苻融牧冀州、虛心禮敬。拜陽平公侍郎、領冀州從事、管征東記室、出總庶事、入爲賓友、衆務修理、處斷無滯。苻堅聞而奇之、徵爲太子舍人、辭以母疾不就。左遷著作佐郎。苻丕牧冀州、爲征東功曹。

③⑥ 冗長を避ける為、引用はしていないが、崔宏はこの後、苻堅の死後の混乱を避けていた所を慕容垂に登用され、後燕に仕える。更に慕容宝の時代になって後燕から逃げ出したものの、彼の有名を知っていた北魏道武帝に捕まり、そのまま北魏に仕えた。三崎二〇一二は、これを一事例として、五胡諸国と漢族が共存して一つの社会を築きあげていた事を指摘する。

③⑦ 代の拓跋什翼犍が燕鳳を登用する手段として、強迫的なやり方を用いた事は広く知られている。ここに「そこまですらないと出仕しない士人」と「そこまですしても出仕させたい王朝」の聞き合いが見て取れる。かかる事象は、胡と漢の両者が折り合いをつけて、政權運営に共同して携わる為の一段階であつたと言える。

『魏書』卷二十四 燕鳳伝

燕鳳、字子章、代人也。好學、博綜經史、明習陰陽讖緯。昭成素聞其名、使人以禮迎致之。鳳不應聘。乃命諸軍圍代城、謂城人曰「燕鳳不來、吾將屠汝。」代人懼、送鳳。昭成與語、大悅、待以賓禮。

③⑧ 左遷された著作佐郎は中央の官職であるが、その後に著作佐郎としての活動が記されず、また苻丕の関東出鎮に合わせて、その幕僚になっている事から見ても、崔宏は関東から動いていないと解釈するのが自然であろう。

③⑨ 慕容垂は前燕国内での立場が危うくなり前秦に亡命した。その後は苻堅の庇護によって前秦国内での地位を築いていった。その結果、淝水の戦いの直後、苻堅の身柄を確保した慕容垂は、弟の慕容徳等の進言を退けて苻堅を無事に長安まで送り届ける。谷川一九九八は、苻堅の鮮卑優待の精神に基づく恩義が、慕容垂の心情を通してその行為を制約したと見做す。鮮卑優待の精神に関しては、その後の研究上において議論があり、またそれを詳細に取り上げる紙幅が無い為、ここでは置いておくとしても、少なくとも慕容垂個人が苻堅へ恩義を感じて、苻堅の生前には前秦と事を構えようとしなかったのは間違いない。苻堅の人心収攬は概ねこの様なものであった。

④⑩ しかし、慕容氏とて、関東士人の中では絶対的なものではなかった。それは諸燕王朝から、北魏に転向した一族が、本文でも触れた清河崔氏以外の他にも多数存在する事からも窺える。例を挙げれば、渤海高氏（『魏書』卷三十二 高湖伝等・渤海封氏（『魏書』卷三十二 封懿伝等）・趙郡李氏（『魏書』卷三十三 李先伝）・范陽盧氏（『魏書』卷四十七 盧玄伝等）等がそれである。かかる事象は、彼らが自身の一族の勢力を保持しつつ、王朝を渡り歩いていた事を示している。即ち、関東士人達は、自身の勢力を最も効果的に保持してくれる勢力に迎合して、生き延びてきたのである。

④⑪ 更に言えば、この関東在地有力者の吸収は、前燕と同様の手法であった。前燕の中原進出時における在地勢力の取り扱い方については、唐一九五五や關尾一九八一に既に指摘がある。

④⑫ この「西州豪族」について、『資治通鑑』は以下の様に記す。

『資治通鑑』卷一百五 孝武帝太元九年（三八四）条
 畏懼、奔渭北馬牧、〔馬牧、牧馬之地、猶漢之牧苑也。〕於是天水尹緯・尹詳・南安龐演等糾扇羌豪、帥其戶口歸畏者五萬餘家、推畏爲盟主。

※下線は筆者

これに拠れば、尹緯等は羌をも動員した事になるが、『晋書』姚萇載記に基づけば、尹緯等は同郷の西方の豪族（漢人）を動員し

た事になる。また、『晋書』姚興載記下尹緯附伝では「羣豪」を扇動した事になっており、やはり「羌」の字は確認されない。なお、陳二〇一五は、この箇所について『資治通鑑』の記事が司馬光等によって書き改められた可能性を指摘している。

④③ 『晋書』卷一百十六 姚萇載記

萇懼、奔於渭北、遂如馬牧。西州豪族尹詳・趙曜・王欽盧・牛雙・狄廣・張乾等率五萬餘家、咸推萇爲盟主。（…中略…）乃從緯謀、以太元九年自稱大將軍・大單于・萬年秦王、大赦境內、年號白雀、稱制行事。以天水尹詳・南安龐演爲左右長史、南安姚晃・尹緯爲左右司馬、天水狄伯支・焦虔・梁希・龐魏・任謙爲從事中郎、姜訓・閭遵爲掾屬、王據・焦世・蔣秀・尹延年・牛雙・張乾爲參軍、王欽盧・姚方成・王破虜・楊難・尹嵩・裴騎・趙曜・狄廣・党刪等爲帥。

④④ 但し、南安の姚氏は、既に關西地方において名士と呼ばれる地位を築いていた。そうであれば、姚萇の拳兵は、關西の名士氏族によって支えられたとも言える。

『晋書』卷一百二十二 呂光載記

光主簿尉祐、姦佞傾薄人也、見棄前朝、與彭濟同謀執梁熙、光深見寵任、乃譖誅南安姚皓・天水尹景等名士十餘人、遠近頗以此離貳。

④⑤ 『晋書』卷一百十六 姚襄載記

襄尋徙北屈、將圖關中、進屯杏城、遣其從兄輔國姚蘭略地鄜城、使其兄益及將軍王欽盧招集北地戎夏、歸附者五萬餘戶。

④⑥ この天水の狄氏は後に太原に徙り、唐代になると宰相狄仁傑を輩出している。この太原狄氏は、後秦の狄伯支の末裔とされており、少なくとも唐代までは、その勢力を維持し続けていた氏族である。

『新唐書』卷七十四下 宰相世系表四下 狄氏

狄氏出自姬姓。周成王母弟孝伯封於狄城、因以爲氏。孔子弟子狄黑裔孫漢博士山、世居天水。後秦樂平侯伯支裔孫恭、居太原、生湛、東魏帳內正都督・臨邑子。孫孝緒。

④⑦ 姚氏集団については、町田一九八三、町田一九八五等参照。そこで町田氏は、前秦に降る前の姚氏集団について考察を加えている。それによると、姚氏集団は羌の姚氏を中核として、氐や漢をも含む諸族の複合集団であり、その結びつきは血縁的側面と地縁的側面が中心であった、とされる。また、姚萇が拳兵した時の集団も同様の要素を確認できる、とも指摘している。

④⑧ また姚萇は晩年に夢で苻堅に苦しめられ、それによって狂ったとされる。話の虚実はさて置くとして、かかる説話が残されている事は、姚萇の苻堅殺しが非難される側面を有していた事を示唆しているよう。

『晋書』卷一百十六 姚萇載記

萇如長安、至於新支堡、疾篤、輿疾而進。夢苻堅將天官使者・鬼兵數百突入營中、萇懼、走入宮、宮人迎萇刺鬼、誤中萇陰、鬼相謂曰「正中死處。」拔矛、出血石餘。寤而驚悸、遂患陰腫、醫刺之、出血如夢。萇遂狂言、或稱「臣萇、殺陛下者兄襄、非臣之罪、願不枉臣。」

④⑨ 關尾氏は、中でも苻堅（前秦）↓姚萇（後秦）↓苻登（前秦）と鞍替えしていった徐嵩と胡空の名前を挙げる。また氏は、彼らの様な事例が少なくなかった可能性を示唆している。

⑤⑩ 後燕の官僚機構そのものについての分析は、既に三崎二〇〇六がある。本論は就任者の来歴に特に注目するものであり、やや視点を異にするが、併せて参照されたい。

⑤① 『資治通鑑』卷一百五 孝武帝太元九年（三八四）条

垂至滎陽、群下固請上尊號、垂乃依晉中宗故事、〔晉元帝廟號中宗。上、時掌翻。〕稱大將軍・大都督・燕王、承制行事、〔晉元帝稱王承制、見九十卷建武元年。〕謂之統府。群下稱臣、文表奏疏、封拜官爵、皆如王者。以弟德爲車騎大將軍、封范陽王、封范陽王。兄子楷爲征西大將軍、封太原王。〔燕本封德爲范陽王、今復其故。楷、格子也。格封太原王、今令楷襲父爵。〕翟斌爲建義大將軍、封河南王。餘蔚爲征東將軍・統府左司馬、封扶餘王。衛駒爲鶴揚將軍、慕容鳳爲建策將軍。〔建策將軍、亦慕容垂一時所署置也。〕帥衆二十餘萬、自石門濟河、長驅向鄴。

⑤② 『資治通鑑』卷一百五 孝武帝太元九年（三八四）条

〔正月〕庚戌、燕王垂至鄴、改秦建元二十年爲燕元年、服色朝儀、皆如舊章。以前岷山公庫儁官偉爲左長史、滎陽鄭豁等爲從事中郎。〔凡帶前字者、皆前燕所授官也。〕慕容農引兵會垂於鄴、垂因其所稱之官而授之。〔即張驥等所推之官也。〕立世子寶爲太子、封從弟拔等十七人及甥宇文輸・舅子蘭審皆爲王。其餘宗族及功臣封公者三十七人、侯・伯・子・男者八十九人。

⑤③ 年次を判明させる為、『資治通鑑』を引用した。記述内容について、『晋書』とは過不足があるものの、大筋は同じである。なお、

『晋書』の「太元八年」は中華書局の校勘記に拠ると、九年の間違いであるとされる。

『晋書』卷一百二十三 慕容垂載記

垂引兵至滎陽、以太元八年自稱大將軍・大都督・燕王、承制行事、建元曰燕元。令稱統府、府置四佐、王公已下稱臣、凡所封拜、一如王者。以翟斌爲建義大將軍、封河南王。翟檀爲柱國大將軍・弘農王。弟德爲車騎大將軍・范陽王。兄子楷征西大將軍・太原王。衆至三十餘萬、濟自石門、長驅攻鄴。農・楷・紹・宙等率衆會垂。立子寶爲燕王太子、封功臣爲公侯伯子男者百餘人。

⑤4 『資治通鑑』卷一百一 海西公太和五年（三七〇）条

（十一月）戊寅、燕散騎侍郎餘蔚帥扶餘・高句麗及上黨質子五百餘人、（蔚、於勿翻。燕蓋遣兵戍上黨、取其子弟留於鄴以爲質。餘蔚、扶餘王子、故陰率諸質子開門以納秦兵。質、音致。句、如字、又音駒。麗、力知翻。）夜、開鄴北門納秦兵、燕主暉與上庸王評・樂安王臧・定襄王淵・左衛將軍孟高・殿中將軍艾朗等奔龍城。〔姓譜、艾姓、晏子春秋齊有大夫艾孔。風俗通有龐儉母艾氏。〕辛巳、秦王堅入鄴宮。

⑤5 『元和姓纂』によると、鄭豁の父の鄭略は前趙の侍中であり、兄弟の鄭楚の子である鄭温は、燕の太子詹事になったという。彼らも王朝を跨いで活動する関東士人の一例である。

『元和姓纂』卷九 鄭氏

滎陽開封。當時六代孫穉、漢末自陳徙河南開封、晉置滎陽郡、開封隸焉、遂爲郡人。穉生興。興生衆、後漢大司農。曾孫熙、生秦・渾。渾魏少府、生崇、晉荊州刺史。曾孫略前趙侍中、生豁・楚。楚生温、燕太子詹事、生三子曄・恬・蘭。曄號北祖、恬號中祖、蘭號南祖。曄七子、白麟・小白・叔夜・洞林・歸藏・連山・幼麟因號七房鄭氏。

⑤6 『晋書』卷一百十三 慕容垂載記

初、垂之發鄴中、子農及兄子楷・紹、弟子宙、爲符所留。及誅飛龍、遣田生密告農等、使起兵趙魏以相應。於是農・宙奔列人、楷・紹奔辟陽、衆咸應之。農西招庫辱官偉于上黨、東引乞特歸于東阿、各率衆數萬赴之、衆至十餘萬。

⑤7 廖二〇一三において、廖氏は慕容垂の建国の時に、河南地方に展開していた「新安集團」（丁零の翟氏を中心として、前燕旧臣、関東士人によって構成された集団）と、「列人集團」（慕容氏宗室を中心として、前燕時代から慕容氏の与党であった氏族、列人の

地の周辺に展開していた烏桓や屠各によって構成される集団)の二つが、中心的な勢力になったと述べる。また廖氏は彼らを含めた慕容農の一派を「列人集団」と呼び、後燕の中核勢力の一端を担う集団であると位置づける。

⑤⑧ 『後漢書』列伝四十八 虞翻伝。また、似たような表現として、『漢書』卷六十九 辛慶忌伝に「贊曰、秦漢已來、山東出相、山西出將。」がある。これらの表現については、孫一九九九や丁二〇一〇等を参照。

参考文献一覧

《日文》

- | | | |
|------|------|---|
| 石井仁 | 二〇一〇 | 「六朝時代における関中の村場について」『駒沢史学』七四 |
| 市来弘志 | 一九九六 | 「中国における『淝水之戦論争』について」『学習院大学文学部研究年報』四二 |
| 内田昌功 | 二〇〇三 | 「十六国時代における諸燕の關係」『北大史学』四三 |
| | 二〇〇八 | 「東晋十六国における皇帝と天王」『史朋』二一 |
| 小野響 | 二〇二三 | 「前趙と後趙の成立—五胡十六国時代における匈奴漢崩壊後の政治史的展開—」『立命館東洋史学』三六 |
| | 二〇一六 | 「前秦苻堅政權論序説」『集刊東洋学』一一四 |
| 川本芳昭 | 一九九八 | 『魏晋南北朝時代の民族問題』汲古書院 |
| 小林聡 | 一九八八 | 「慕容政權の支配構造の特質—政治過程の検討と支配層の分析を通して—」『九州大学東洋史論集』一六 |
| 關尾史郎 | 一九八一 | 「前燕政權（三三七—三七〇年）成立の前提」『歴史学研究』一 |
| | 一九八八 | 「大宮」小論—後秦政權（三八四年—四一七年）の軍事力と徙民措置—『栗原益男先生古稀記念論集
中国古代の法と社会』汲古書院 |
| 谷川道雄 | 一九九八 | 『増補 隋唐帝国形成史論』筑摩書房（初出…一九七一年） |
| 藤井秀樹 | 二〇〇一 | 「前秦政權と天水尹氏」『古代文化』五三 |
| 朴漢濟 | 二〇一〇 | 「東魏—北齊時代の鄴都の都城構造—立地と用途、その構造的な特徴—」『中国史学』二〇 |

町田隆吉

一九八三

『後秦政權の成立——羌族の国家形成（その一）——』『東京学芸大学附属高校大泉校舎研究紀要』七

三崎良章

一九八五

『後秦政權の成立——羌族の国家形成（その二）——』『東京学芸大学附属高校大泉校舎研究紀要』九

吉本道雅

二〇〇六

『五胡十六国の基礎的研究』汲古書院

二〇一二

『五胡十六国 中国史上の民族大移動【新訂版】』東方書店（初出・二〇〇二年）

《中文》

陳勇

二〇一五

『資治通鑑』十六国資料釈証【前秦、後秦国部分】『中国社会科学出版社』

唐長孺

一九五五

『魏晉南北朝史論叢』生活・読書・新知三聯書店

丁華

二〇一〇

『閩東出相、閩西出將』初探』『新西部』二〇一〇年十六期

廖基添

二〇一三

『慕容農与後燕興衰——以“列人集团”为中心的考察』『中華文史論叢』一一二

羅新

二〇〇四

『十六国北朝的五德歷運問題』『中国史研究』二〇〇四年第三期

孫家洲

一九九九

『論漢代的“区域”概念』『北京社会科学』一九九九年第二期

朱希祖

一九三七

『十六国旧史考』『制言』一三

鄒逸麟（主編）

二〇〇一

『中国歴史人文地理』科学出版社

【附記】本論は、二〇一六年三月五日に行われた第五回若手アジア史論壇大会「王統の継承と交替——王権の理念と実態を考える——」（東方学会「若手研究者の研究会等支援事業」、於中央大学）及び同年三月一八日に行われた南京・京都六朝史若手研究者交流会（於南京大学）における口頭発表の一部を基に、大幅な改稿を施したものである。両会において多くのご助言を賜った皆様に記して深く感謝申し上げます。

（本学大学院文学研究科博士課程後期課程）